

図7 - 満奇洞平面図および側面図

<大久保雅弘+高安克己>



鍾乳洞には個性がある、といわれる。曲りくねった迷路型、縦にすっぽり抜けている煙突型など形態は千差万別であるが、一般には横穴式と竪穴式に大別する。この満奇洞は、典型的な横穴式鍾乳洞である。地下の洞くつに入るとき、誰も地上の景色とは別ものを期待する。その人間の目を楽しませてくれるものは、鍾乳石や石筍など、自然がつくった造化の妙である。それらは、石灰岩の割れ目からしみ出した液によってできた装飾物であり、二次生成物ともよばれている。また、大小のプールもあって、ライトで照らし出された水面に洞内の景観が反射する光景は素晴らしい。満奇洞は小型の鍾乳洞ではあるが、これらの二次生成物がふんだんに見られるし、透きとおった

プールもあって、きわめて変化にとんでいる。図にはすべてを描ききれないので、比較的目的つものを表現した。このように、鍾乳洞とか二次生成物というのは、自然の作用もたらした地学現象であるから、研究の第一歩は図面作りから始まる。それは、洞くつの形を平面に投影した平面図を作ることが中心であるが、形態が複雑であるから、所どころで補助的に断面図を描く。そして図が完成したら、洞くつを横からみた側面図を作図する。満奇洞の場合、横穴式であることは側面図をみればひと目で理解されるだろう。また、平面図でみると、奥の方で洞くつが何本か平行していることに気づかれる

だろう。これは、平行した方向(北西-南東方向)に走る亀裂に沿って、洞くつができたことを意味している。さらに、中央付近に大きなリムストンの群れがみられる。これらは、かつての水溜りの縁であったから、洞内の水量も次第に減り、プールが縮少してきたことがよみとれる。満奇洞は観光洞くつのなかでも、自然の状態が最もよく保存されているものの一つである。しかし、人びとが入りやすくなるにつれて、自然が遠ざかっていくのが普通であり、ここでも、洞くつ生物をほとんど見ることが出来ない。

<大久保雅弘 = 島根大学文理学部教授>

鍾乳石=天井からつららのように垂れ下がっているもの  
 石筍=床にみられるタケノコ状の石  
 石柱=天井と床をつなぐ柱で鍾乳石と石筍が合体したもの  
 フローストン=床や斜面にセメントをはったような滑らかな石の層  
 リムストーン=田のあぜ道のような形をした石の堤防  
 ノッチ=壁の一部が弓なりにえぐられた形になっているもの

